

築館町文化財調査報告書第12集

伊治城跡

—平成10年度：第25次発掘調査報告書—



平成11年3月

宮城県 築館町教育委員会

伊治城跡

—平成10年度：第25次発掘調査報告書—

平成11年3月

築館町教育委員会

序

築館町には、先人が残した数多くの文化遺産があり、これら旧石器時代から現代へと続く歴史的遺産・文化財の調査研究と保護・活用に積極的に取り組んで、未来に受け継いでいくことが、現在、生活している我々に課せられた使命であります。

「幻の城柵」として、所在地が不明であった伊治城跡の発掘調査は、昭和52年度から3年間、宮城県多賀城跡調査研究所が多賀城関連遺跡発掘事業の一環として実施いたしました。その後、昭和62年度より築館町教育委員会が、宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て、発掘調査を実施してまいりました。

本年度の発掘調査は、昨年までの調査成果をうけて、引き続き伊治城の外郭区画施設の範囲及び構造をつかむため、遺跡の東縁辺地区に調査区を設定して、発掘調査を実施してまいりました。調査の結果、伊治城の東辺外郭区画施設に伴う2条の並行する大溝跡が検出されました。このことは、従来想定していた伊治城の外郭範囲よりも東に広がりをもつことを確認することができました。また、その他の遺構としては、豊穴住居跡を検出することができました。

最後になりましたが、本調査を実施するにあたり、協力していただいた土地所有者の方々に感謝申し上げるとともに、調査並びに報告書の作成を担当していただきました宮城県教育庁文化財保護課の皆さんに深く感謝を申し上げます。

今後も、外郭区画施設の全容を解明するために、城生野地区の台地縁辺を中心に発掘調査を実施してまいりたいと思います。

築館町教育委員会

教育長 南 條 正 臣

例　　言

1. 本書は、宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する伊治城跡の平成10年度発掘調査（第25次調査）の成果をまとめたものである。
2. 調査は、国庫補助事業計画にもとづくものであり、築館町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課・築館町教育委員会が担当した。
3. 調査時における地区割りは、城生野公民館前の伊治城跡「原点1」を基準点（0.0）とし、この点と「原点2」とを結ぶ線を基準として直角座標を組み、割り出している。基準線の南北軸は $2^{\circ} 8' 8''$ 西偏する。基準点の座標値（第X系）は以下のとおりである。

原点1 X = -137,175.996 Y = 18,059.271

原点2 X = -137,172,798 Y = 18,145.712

図中の地区割り：W-150、S-400などの表記は、原点1から西に150m、南に400mであることを表す。

4. 本遺跡の位置を示した地形図（第2図）は、建設省国土地理院発行の1/25,000の地形図「金成」、「築館」を複製して使用した。
5. 本書のⅡ章の文章および付表1・2は第22次・第23次調査報告書から転載し、一部加筆したものである。
6. 土色の記載は「新版標準土色帳」（1973）にもとづいた。
7. 本書の作成は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、課員の検討を経て、後藤秀一が編集・執筆した。
8. 発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品は、築館町教育委員会が保管している。
9. なお、これまでの本遺跡の発掘調査および調査報告書（14冊）については、本文の後の付表1にまとめて示してある。

目 次

序
例 言
目 次・調査要項

I. 遺跡の位置と概要.....	1
II. 周辺の遺跡.....	2
III. 調査の目的と方法・経過.....	3
(1) 調査の目的.....	3
(2) 調査の方法・経過.....	3
IV. 基本層序.....	5
V. 発見された遺構と遺物.....	6
VI. 考 察.....	19
(1) 遺構の時期・年代.....	19
(2) 外郭東辺区画施設について.....	21
(3) 内郭東辺区画施設について.....	25
VII. ま と め.....	25
参考文献.....	26
付表 1. 「伊治城跡」発掘調査および報告書一覧	
付表 2. 伊治城および栗原郡に関する古代史年表	
写真図版	
報告書抄録	

調 査 要 項

1. 遺 跡 名 伊治城跡（宮城県遺跡登録番号：41007）
2. 所 在 地 宮城県栗原郡築館町字城生野
3. 調 査 主 体 築館町教育委員会
4. 調 査 担 当 築館町教育委員会 千葉長彦
5. 調 査 協 力 宮城県教育庁文化財保護課 後藤秀一 藤村博之
6. 調 査 期 間 第25次調査：1998年10月23日～11月13日、11月24・26日
7. 調 査 面 積 約450m²

I. 遺跡の位置と概要

伊治城跡は、7世紀中頃から9世紀にかけて、東北地方を中心に設置された城柵の中の一つであり（第1図）、宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する。この場所は、奈良・平安時代を通して東北地方の政治・軍事の中心である国府多賀城跡から北へ約52kmの位置にある。

遺跡は、標高20~25mほどの築館丘陵東端部の平坦な河岸段丘上に立地しており、周囲は北が二迫川、南から東にかけては一迫川、西は北から入り込む大きな沢によってそれぞれ区画されている。遺跡の範囲は、これまでの調査成果と地形的にみて、

およそ東西700m、南北900mほどとみられる。なお、丘陵北端部では、昭和52年度（宮城県多賀A城跡調査研究所 1978）と昨年度（築館町教育委員会 1998）の調査で確認された外郭北辺区画施設である土塁と大溝が、現在でも高まりと空堀状の窪みとして遺存しているのが観察される。

伊治城跡の所在地については、本遺跡の発掘調査が開始される以前は、本遺跡を有力な擬定地と考えるに留まっていた。しかし、昭和52年より開始された発掘調査（付表1）の結果、本遺跡が伊治城跡であることが明らかになった。すなわち伊治城跡は、多賀城跡や他の城柵遺跡と同様に、溝と土塁による外郭区画施設を周囲に巡らし、その南東部に周囲を築地で区画した中枢部である政府が位置している。そして政府では、正殿を中心とした整然とした「コ」の字型配置をとる建物群が検出されている。また、政府の建物群には大きくみて

3時期の変遷があり、第2期の建物群は大規模な火災で焼失していることが確認されている（築館町教育委員会 1993）。この他伊治城跡では、政府を取り囲むように整然と配置された建物で構成される官衙域（内郭）が区画されており、政府、内郭、外郭といった三重構造をなしていることが確認されている（築館町教育委員会 1991）。

ところで続日本紀によれば、伊治城は神護景雲元年（767）に完成したことが明らかな城柵で、その後にもしばしばその名が記事に登場する城柵としても知られている。その中で最も知られている記事は、宝亀11年（780）の記事である。それには伊治城で上治郡の大領であった伊治公皆麻呂が接觸使紀広純、牡鹿郡大領道嶋大橋を殺害したことと、その数日後には多賀城も攻撃されて焼き払われていることが記されており（付表2）、当時の律令政府にとってはかなり衝撃的な事件としてとりあげられている。



第1図 東日本の古代城柵（進藤1991に加筆）

II. 周辺の遺跡

本遺跡（第2図1）周辺には、伊治城跡と同時代の奈良・平安時代の遺跡が多く分布している（第2図）。それらは一迫川、二迫川沿いの河岸段丘や低丘陵上に立地しており、佐野遺跡（6）、糠塚遺跡（7）、大門遺跡（8）、御駒堂遺跡（14）、長者原遺跡（21）などがあげられる。なかでも糠塚遺跡では奈良平安時代の住居跡が30軒検出されており、住居跡出土土器は県北地域の国分寺下層式の基準資料になるものである（小井川・手塚 1978）。また、御駒堂遺跡は7世紀末から8世紀初頭に関東地方からの移住が想定されるような遺物・遺構が発見されており（小井川・小川 1982）、奈良時代以前の栗原地域の動向を知る上で注目される。この他、本遺跡の東4kmには、志波姫町狐塚遺跡



No.	遺跡名	立地	種別	時 代	No.	遺跡名	立地	種別	時 代	No.	遺跡名	立地	種別	時 代
1	伊治城跡	段丘	城壁跡	古墳、奈良・平安	10	刈穂袋遺跡	自然堤防	包含地	圓文、古代	19	無縫合遺跡	丘陵斜面	包含地	圓文、古墳、古代
2	愛原寺跡	丘陵	寺院跡	古代	11	刈穂第跡	自然崖壁	城	中世	20	西船渡跡	段丘	糠塚跡	圓文、中世
3	尾松遺跡	丘陵斜面	包含地	古代	12	鶴ノ丸遺跡	段丘	集落跡	圓文・近世	21	長者原遺跡	段丘	集落跡	古墳、古代
4	大佛穴古墳群	丘陵斜面	古墳	古墳、古代	13	宇南遺跡	段丘	堆积跡	圓文・近世	22	菅原長坂遺跡	丘陵斜面	包含地	圓文、古代
5	幡瀬原古墳群	丘陵斜面	古墳	古墳、古代	14	御駒堂遺跡	段丘	集落跡	圓文・近世	23	高野山古墳群	丘陵斜面	円墳	古墳
6	佐野遺跡	丘陵	集落跡	弥生、古墳	15	山之上遺跡	段丘	集落跡	圓文、古代	24	宮野原丘陵	丘陵	城跡	中世
7	糠塚遺跡	段丘	集落跡	弥生、奈良・平安	16	木戸遺跡	丘陵	集落跡	圓文、古代	25	高田山遺跡	丘陵	包含地	圓文、古代
8	大門遺跡	段丘	集落跡	圓文、奈良・平安	17	佐内延葉遺跡	丘陵	集落跡	圓文、奈良・平安	26	喜阿山古墳群	丘陵斜面	包含地	古墳
9	風冢遺跡	段丘	墓跡	古代	18	葛貝貝塚	丘陵	貝塚	圓文、弥生	27	東前城跡	丘陵	城跡	中世、近世

第2図 伊治城跡と周辺の遺跡

(9)、さらに北方6kmには、須恵器や瓦を焼成した金成町小迫窯跡があり、これらの製品が本遺跡にも供給されていた可能性がある。

III. 調査の目的と方法・経過

(1) 調査の目的

伊治城跡の発掘調査は、平成7年度以降外郭区画施設の確認、その構造・変遷の把握を目的として実施してきている。

これまでの外郭区画施設を対象とした調査について概観してみると、外郭北辺については、昭和52年度、平成元年度の第12次調査、昨年度の第24次調査が施されている。それによれば外郭北辺では、調査地点によって検出状況が異なるが、東西方向の2条の土塁・溝および南側の土塁の内側（南側）には溝状の土取り跡も土塁に沿って確認されている（宮城県多賀城跡調査研究所 1978、築館町教育委員会 1989・1998）。

西辺を対象としては平成7年度に第22次調査、8年度に第23次調査を実施している。西辺では外郭区画施設本体の積土は検出されていないが、それに伴うとみられる南北方向の溝とその内側（東側）にそれと平行する2条の土取り跡とみられる溝状遺構が検出されている（築館町教育委員会 1995・1996）。

東辺については、昭和63年度に8次調査、平成2年度に第16次調査を実施しており、南北方向の溝2条を確認している。そしてこれらの溝のうち東側の溝は、堆積土中に灰白色火山灰層がみられることから古代のもので、外郭区画施設に関連するものと考えられた。そしてこの溝は外郭北辺に続くものとみられた（築館町教育委員会 1990）。

以上のことから伊治城跡の外郭区画施設は、土塁とそれに伴う溝と想定されるが、各辺における調査成果が必ずしも一致していないことも事実である。特に東辺については、いずれの調査も狭い範囲の調査や断面観察であることから、北辺や西辺と較べ状況は判然としない。一定の広がりをもった確実な外郭区画施設の検出が望まれるところである。

そこで今回の第25次調査は、外郭東辺区画施設の検出を主な目的として、遺跡南東部にあたる地蔵堂地区の段丘東縁部を対象として実施した。

(2) 調査の方法・経過

地蔵堂地区では平成5年度に内郭の範囲を確定することを目的とした第20次調査を実施し、内郭区画施設の南東隅を確認している（築館町教育委員会 1994）。今回の調査区は、確実に区画施設を検出できるよう東西に長く設定することにし、第20次調査区の町道を挟んだすぐ北側の段丘面の東縁部（A区）と高さおよそ2m前後の段丘崖から東へ下った一迫川へ続く斜面（B区）の2ヶ所に設定した（第3図）。周辺一帯の現況は、A区のある段丘上の平坦面が一部宅地と畠として利用されている以外は水田で、B区を設定した斜面は、B区のすぐ東側に小さな段が認められ、その段より上は畠として利用されているが、段から下の一迫川へ下る斜面は荒れ地と河原になっている。



第3図 調査区と周辺の地形

調査は10月23日にA区の表土剥ぎから開始した。A区では地山のローム面で竪穴住居跡、土壌、溝や小規模なピットを検出した。引き続きB区の表土剥ぎにとりかかり、西端部のローム層の下層の基盤面で、最上層に灰白色火山灰の堆積が認められるSX503土取り跡とSD510南北溝、第2層上面でSK507土壌、第3層上面でSD504溝・SI506竪穴住居跡・SD505溝・SD508溝をそれぞれ検出した。

遺構の精査はA区から開始した。重複する各遺構の平面形の確認の後、出土遺物から近代以降の最も新しい東端部のSD501を掘り下げた。SD501は一度掘り直されており、SI493竪穴住居跡を大きく壊していることが判明した。このため遺存状況の良くないSI493は床面まで掘り下げることにした。また、竪穴住居跡の遺存状況を調べるために、SI492と重複してこれより新しく、搅乱で一部壊されていたSI491竪穴住居跡の西半部を床面まで掘り下げることにした。SI491の床面からは須恵器の高台杯2点と不明銅製品1点が出土している。この他にSI492竪穴住居跡は、遺構の検出段階ではほぼ床面となるほど遺存状態が悪いもので、床面の精査をおこない主柱穴などを一段掘り下げた。

また調査区南西隅では第20次調査で検出されていた内郭の区画施設に伴う外側（東側）の溝（S-D331）の続きであるSD498を検出した。

その後柱穴の精査、小規模なピットの精査を開始したが、柱痕跡が認められるものもあるが建物として構成されたものは確認できなかった。

B区のSX503、SD504はおよそ9mほどの間隔ではほぼ平行している。これらについては、調査期間の関係から完掘が不可能なため、調査区北壁に沿って断ち割り調査を実施して内容の把握をおこなうこととした。SD504は湧水が激しいため底面まで掘り下げることはできなかったが、途中に灰白色火山灰層が認められ、古代の溝であることが判明した。またSX503は、確認段階では溝とみられたが、断ち割り調査の結果、深さの異なる土壌を連続して掘り下げたような状況であることから土取りの跡と考えられた。またSX503では地形の低い東側から供給された地山ローム粒や小ブロックを多量に含む堆積土がかなり認められ、これらが北辺上墨の崩壊上に類似することから、現況では認められないが、古代においてはSX503の東側に上墨の存在が想定された。

以上のことについて遺構の写真撮影と平面図の作成をおこない、全体写真の空撮を除く作業を11月13日に終了し、翌14日に地元の住民を対象とした現地説明会を開催した。その後調査区全体の空撮を11月24日を行い、翌日から埋め戻しを開始して11月26日にすべての作業を終了した。

IV. 基本層序

A区は後世の削平のため表土直下が直ちに地山のローム層である。一方B区は、地形的に高い西側の段丘側からの自然堆積が地山のローム層上に多く認められる（第4図）。

第1層：表土層である。凝灰岩質の小礫を多く含む暗褐色土（10YR3/3）。

第2層：凝灰岩質の小礫を少し含むにぼい黄褐色土（10YR5/4）

第3層：凝灰岩質の小礫を少し含む黒色土（10YR2/1）。なお、第3層の堆積後に灰白色火山灰が降下・堆積している。

第4層：凝灰岩質の小礫をやや多く含む暗褐色土（10YR3/3）。

第5層：凝灰岩質の小礫をわずかに含む黒褐色土（10YR3/2）。

第6層：第5層と類似するが土色が黒味が強い（10YR2/2）。凝灰岩質の小礫をわずかに含む。

第7層：灰黄褐色土（10YR4/2）。下層の地山のローム層への漸移層。

なお、図示していないが第7層の下層に地山のローム層（第8層）がある。

V. 発見した遺構と遺物

今回の調査で検出した主な遺構としては、B区で調査目的であった外郭東辺区画施設に伴う南北溝1条、土取りの跡の溝状遺構1条、竪穴住居跡1軒、土壙1基、溝2条、A区で竪穴住居跡9軒、内郭区画施設に伴う溝1条がある。またこの他には建物跡にはならなかったが柱穴や土壙、溝なども検出している（第4図）。これらの遺構のなかで精査、完掘したものは、A区のSI491～493、SD498、S D501、柱穴、B区のSX503、SD504・510であり、その他の遺構については平面確認に留めてある。

遺物は竪穴住居跡や溝などの遺構から出土している他に、B区の堆積層（基本層序の第3層）から繩文土器の破片と石鎌が各1点出土している。以下、精査をおこなった遺構を中心に、外郭東辺区画施設から順に概要を記述してゆく。

なお、A区の各遺構の検出面については、すべて地山ローム面かその下層の基盤面であることから以下の記述のなかでは特に触れないこととする。

(I) 外郭東辺区画施設

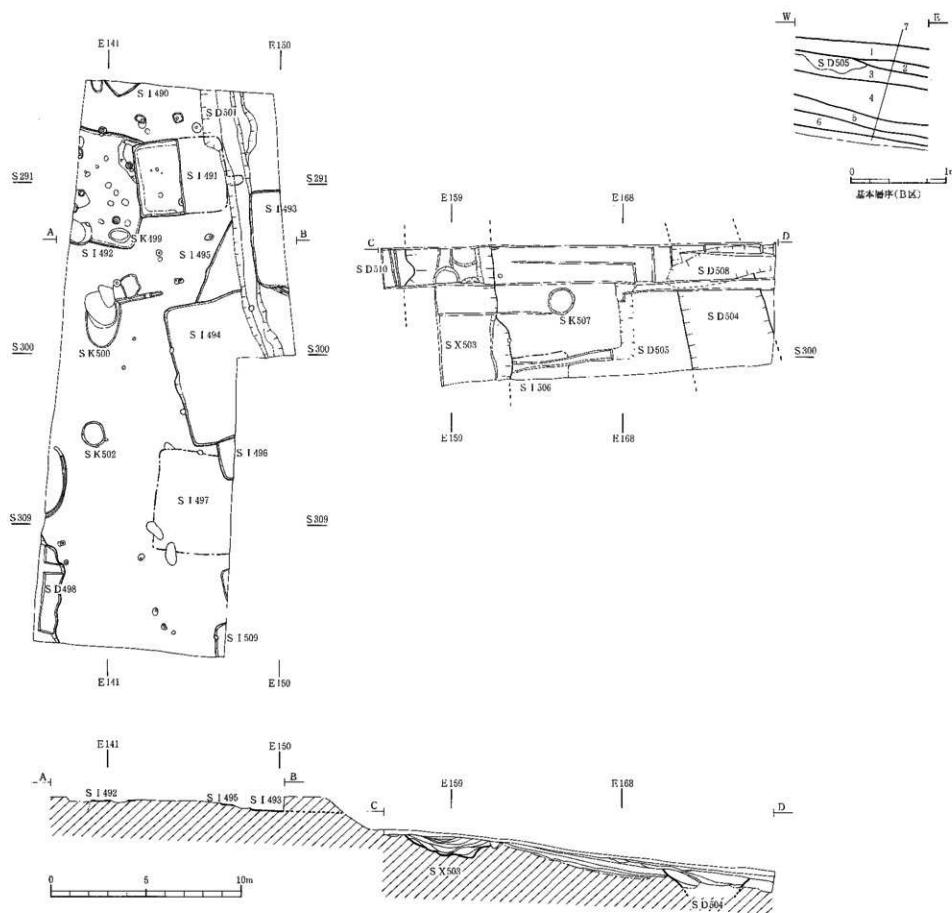
外郭東辺区画施設に関連する遺構としては、B区で検出したSX503土取り跡、SD504南北溝がある。両者は、約9mの間隔をおいてほぼ並行している。

SX503（第5図）

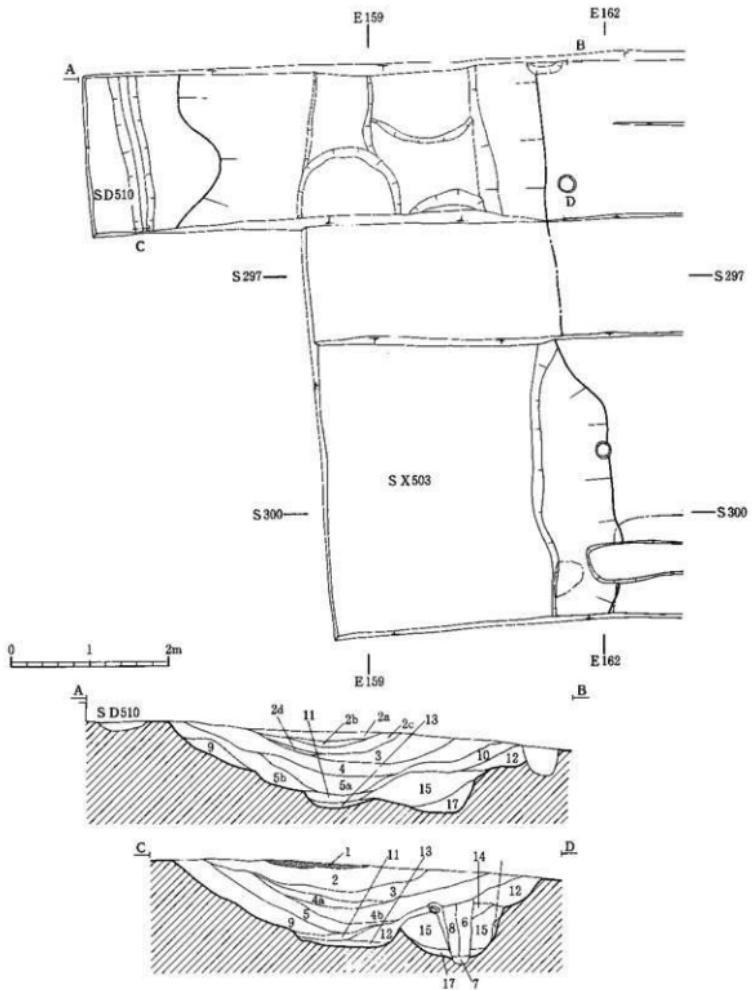
B区西端部の地山ローム層下層の基盤面で検出した土取りの跡である。平面の輪郭は、東縁辺がほぼ直線状をなす一方、西縁辺は狭い範囲の確認であるが、蛇行するように大きく出入りしている。規模は上幅が北端部で約5m、狭くなる部分で約4m、深さは約1mである。東側は段状に掘り込まれており、底面には凹凸がみられ、深さの異なる土壙を連続して掘り込んだような状況を示している。方向は、東側上端部でみると、北で約10度西へ偏している。

堆積土は最上層に灰白色火山灰層が認められる他、大きくみて13層に分けられる。これらは、①地山細粒を均質に含む黒褐色土（2・4・5・9・11・13～17）と②地山のローム層小ブロック・小粒や基盤の小礫粒および様々な色の土粒を比較的均質に多く含むもの（3・10・12）に区別でき、いずれも自然堆積とみられる。また、①は東西両側から流入しているのに対して、②は、標高の低い東側からだけ流入している。

遺物は、図示できるものはないが、2～4層にかけてやや多くの須恵器と土師器の他に瓦が出土



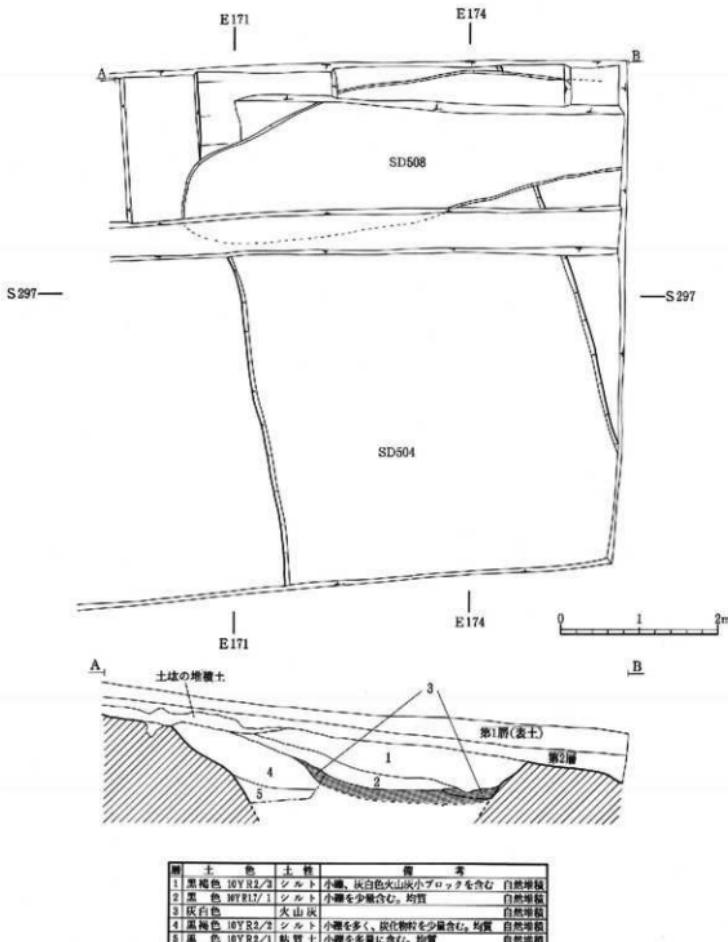
第4図 基本層序・検出遺構配置図



編	土色	土性	備考	編	土色	土性	備考
1	灰白色	火山灰		10	褐褐色	2.5Y3/2	樹根土 地山ブロック小粒、小礫を多量に含む
2	黒褐色	10YR1/1	シルト	11	褐褐色	2.5Y3/1	シルト 炭化物殻、鐵土粒、地山灰を少量含む
3	深褐色	2.5Y3/2	砂質シルト	12	褐褐色	2.5Y3/2	地山ブロック粒、小礫を多量に含む
4	黑褐色	10YR2/2	シルト	13	褐褐色	10YR2/2	地山ブロック粒を含む
5	黑褐色	2.5Y3/2	シルト	14	褐褐色	10YR2/3	均質
6	黑褐色	2.5Y3/2	シルト	15	褐褐色	10YR2/3	均質
7	暗褐色	10YR3/2	シルト	16	褐褐色	2.5Y3/2	地山ブロックを含む
8	深褐色	10YR3/2	シルト	17	黃灰黃色	2.5Y4/2	地山ブロックを多量に含む
9	黑褐色	2.5Y2/1	シルト				自然堆積

第5図 SX503土取り跡

している。須恵器には壺、高台壺、蓋、瓶類、甕があり、このうち6点ある壺の底部資料では、ヘラキリ無調整のもの1点、ヘラキリの後にナデ調整のもの2点、ヘラキリの後に手持ちヘラケズリ調整のもの1点、切り離し技法が不明で回転ヘラケズリ調整のもの1点がある。なお、この中の手持ちヘラケズリ調整のものの底部外面には、判読できないが墨書きがみられる。



第6図 SD504溝

土師器にはロクロ調整の甕とロクロ調整によらない（以下非ロクロ調整と呼ぶ）の甕の両者がみられる。破片の数では非ロクロ調整のものが多い。瓦は平瓦の破片が3点出土しており、この中に1枚作りのものが確認できる。

SD504(第6図)

B区東端部の第3層上面で検出した南北溝である。平面の輪郭は東西両縁ともほぼ直線状をなす。規模は幅が北端部で約4.8m、湧水が激しく完掘できなかつたため底面の状況は不明であるが、深さは約1mまで確認しており、断面形は逆台形と推定される。

堆積層は5層確認しており、3層が灰白色火山灰層である。これらは、1・2・4層が地山のローム小ブロック・細粒や基盤の小疊・細粒、炭化物を含む黒色～黒褐色土、5層が底面に近い堆積層のためか均質な黒色粘質土で、いずれも自然堆積である。方向は西側上端部でみると、北で約11度西へ偏している。

遺物は少量出土しており、すべて破片資料である。1・2層からは須恵器、土師器、瓦の他に羽口2点、鉄滓1点、弥生土器片（撫糸文）1点、繩文土器片1点、剥片2点が出土している。須恵器には壺2点、高台壺1点、蓋1点、甕7点があり、このうち壺では底部の切り離し技法が不明で手持ちヘラケズリのものが1点みられる。蓋は端部の破片、甕は頸部に横描の波状文のある口縁部破片が1点、平行叩きの体部破片が6点である。土師器は、ロクロ調整の甕3点、非ロクロ調整で内面黒色処理（以下内黒と呼ぶ）の壺4点、甕の胸部破片20数点が出土している。瓦は平瓦の破片が1点、丸瓦の玉縁部破片1点が出土している。

4・5層からは、底部の切り離し技法がヘラキリ無調整の須恵器の壺と特徴の捉えられない土師器の小破片が各1点出土している。

(2) 積穴住居跡

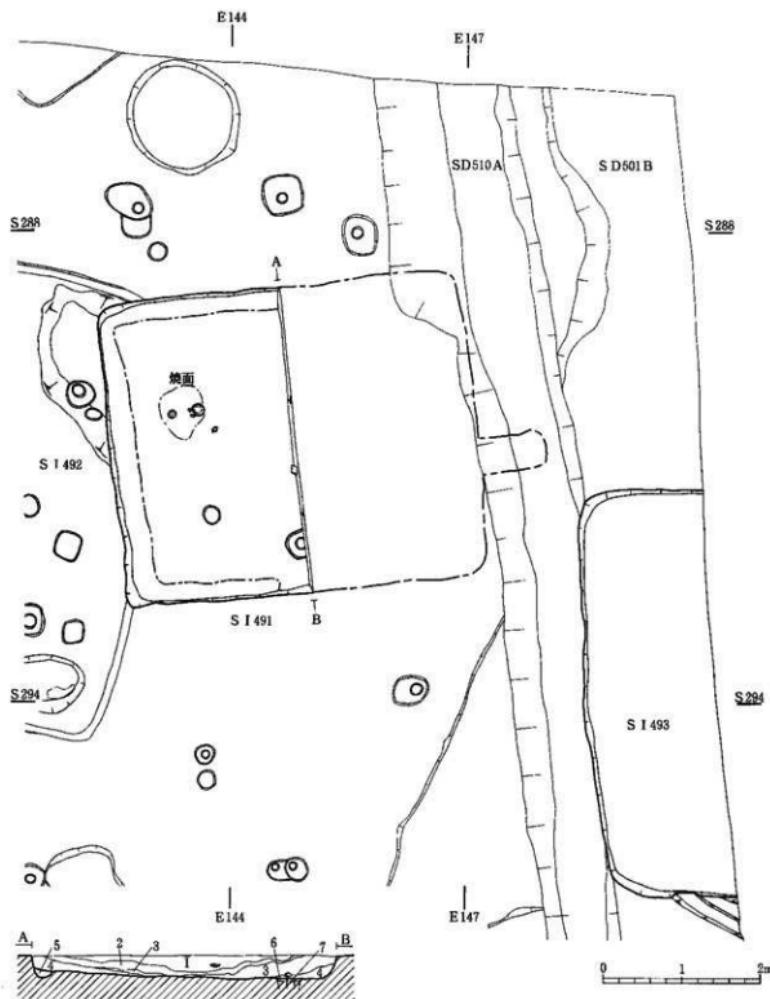
積穴住居跡はA・B両区で10軒検出しているが、このうち精査を実施したのはA区のSI491～493の3軒である。

SI491（第7・8図）

調査区北半中央部で全体形を検出した住居跡であり、SD501溝、SI492住居跡と重複し、SI492より新しく、SD501より古い。本住居跡は、住居跡の遺存状況を調べる目的で、擾乱により一部壊されていた西半部を床面まで掘り下げてある。

規模は北辺約5m、西辺約4m、平面形は隅丸方形をなす。東辺南寄りにカマドが付設されている。側壁はほぼ垂直で、高さは20～30cmほどである。床は掘方埋土や貼床はみられず粗砂状の継まりのない地山面で、ほぼ平坦である。なお、床面の中央部付近には50～60cmほどの赤変した不整円形の範囲が認められた。これは床の土質によるためか硬く焼き継まっていないが、焼面と考えられた。

周溝は上幅20～30cmで、深さ約10cmで、堆積土は暗灰黄色土1層である。北辺～西辺～南辺と巡っているが、南辺中央部で途切れている。柱穴は住居跡の対角線上にはみられないが、周溝の途切れた南辺中央部の壁から40cmほど離れた床面上で1個を検出している。柱穴は一辺40cmほどの方形で、



編	土色	土堆	備考
1	黒褐色 10YR2/2	シルト	炭化物を含む 自然堆土
2	黒褐色 2.5Y3/2	シルト	炭化物、地山ブロック、小礫を含む 自然堆土
3	黒褐色 10YR1/2	シルト	地山の、炭化物を含む 自然堆土
4	黒褐色 10YR1/2	シルト	地山ブロックを少量含む 自然堆土
5	褐色質性 2.5Y4/2	シルト	周辺埋土 自然堆土
6	黒褐色 10YR3/2	シルト	柱穴埋土 自然堆土
7	黒褐色 2.5Y3/1	シルト	柱痕

第7図 S I 491, S I 493住居跡

柱痕跡は径約15cmである。住居の方向はカマドを中心にして、東で北へ約5度偏している。

堆積土は炭化物を含む黒褐色土で4層に分けられ、いずれも自然堆積である。

遺物は床面から須恵器の高台壺2点（第8図1・2）と不明の金属製品1点、また堆積土からは須恵器と土師器の他に砥石1点（10）、弥生土器片（撲糸文）1点、縄文土器片1点が出土している。床面出土の須恵器の高台壺で大型ものは、底部の切り離し技法がヘラキリである。金属製品は、緑青がみられることから銅製品とみられるが、未処理のため何であるかは不明である。

堆積土出土の須恵器には図示したものはないが、壺5点・蓋の端部の破片2点・瓶類の体部破片1点・甕の体部・口縁部破片20点がある。このうち壺の底部資料では、底部の切り離し技法が不明で手持ちヘラケズリ調整のもの2点、回転ヘラケズリ調整のもの1点がある。土師器にはロクロ調整とみられる両面黒色処理（以下両黒と呼ぶ）の高台壺1点、非ロクロ調整の甕の口縁部・胴部破片20数点の他、古墳時代の壺類の破片3点がある。甕では、胴部外面の調整をみると、ハケメ調整のものとケズリ調整のものがほぼ半々みられる。砥石は折れた後に火を受けている小型のものである（10）。

SI493（第7・8図）

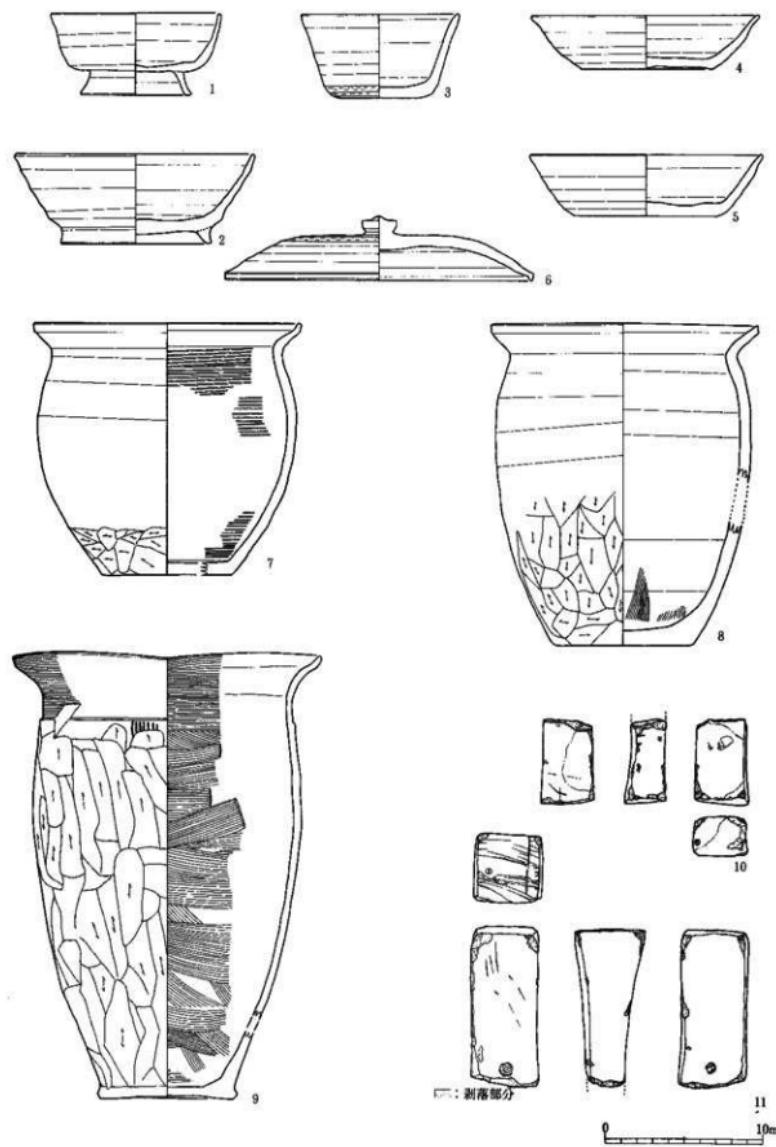
調査区北半東端部で検出した住居跡で、東半部は調査区外へ広がる。SD501溝と重複しこれより古い。本住居跡は、SD501に大きく壊されており、最も残りの良い部分でも床面から10cmほどしか遺存しておらず、また堆積層出土の遺物がむき出しになっていたため床面まで掘り下げることにした。

規模は西辺約5m、北辺1.5m以上で、平面形は隅丸方形とみられる。カマドは検出部分では認められない。側壁は5~10cmほどである。床は掘方埋土や貼床はみられず、粗砂状の縮まりのない地山面で、多少凹凸がみられる。周溝・主柱穴は認められない。住居の方向は西辺でみると、北で約4度西へ偏している。

堆積土は自然堆積の炭化物を含む黒褐色土1層である。

遺物は堆積層から比較的まとまって出土している。須恵器と土師器の他に砥石1点、スサ入り粘土塊1点、古墳時代の壺の二重口縁の破片1点がある。須恵器は壺4点・高台壺1点・蓋2点・瓶類の体部破片1点・甕の胴部破片2点である。壺は、底部から体部下端付近にかけて回転ヘラケズリ調整の小形でコップ状のもの（第8図3）1点、底部の切り離し技法がヘラキリで無調整のもの（4）・軽いナデ調整のもの（5）が各1点、底部の切り離し技法が不明で手持ちヘラケズリ調整のもの1点である。高台壺は高台が剥落しているものである。蓋は大型でつまみの形が擬宝珠のもの（6）とつまみの剥落している天井部破片である。

土師器はロクロ調整ものに小形の甕（7・8）2点がある。非ロクロ調整のものには、壺と甕がある。壺は内黒で外面ミガキ調整の口縁部～体部破片1点であり、外面に沈線がみられ。甕は図示できる1点（9）以外に胴部破片が10数点ある。この他古墳時代の壺の口縁部破片が1点が出土している。砥石は両側から穿孔しようとした痕跡のある折れたもの（11）である。折れた後に火を受けているとみられる。



第8図 S1491・S1493住居跡出土遺物

以上が床面まで掘り下げた住居跡であるが、次に平面確認に留めてあるものについて簡単にまとめておく。出土遺物はすべて遺構の確認段階で出土したものであり、全て破片資料で図示できるものはない。

SI492（第4図）

調査区北西部で検出した住居跡であり、西半部は調査区外へ広がる。SI492住居跡、SK499土壌と重複し、いずれよりも古い。本住居跡は、遺構の確認段階で床面がほぼあらわれるほど遺存状況が悪い。

規模は、南北約5.8m、東西が後述する主柱穴の位置関係からおよそ5m前後と推定され、平面形は隅丸方形とみられる。カマドは検出部分には認められない。床は掘方埋土や貼床はみられず掘り込まれた地山のローム面で、ほぼ平坦である。周溝は幅5~10cmで、北辺~東辺~南辺と巡っている。主柱穴は住居跡の対角線上の4ヶ所で検出しており、一辺30~40cmほどの方形・不整形である。南西部以外の柱穴で柱痕跡を検出しており、径15~18cmである。住居の方向は北辺でみると、西で約15度北へ偏している。

遺物は床面から須恵器の甕の口縁部破片1点と土師器の非ロクロ調整で内黒の环の体部破片1点と甕の胴部破片4点が出土している。

SI490（第4図）

A区北西隅付近で検出した住居跡である。検出した部分は南辺約1.5m、西辺約1.3mである。遺物は須恵器と土師器が出土している。須恵器は甕の胴部破片1点、土師器は非ロクロ調整で内黒の环1点と甕の胴部破片5点である。

SI494（第4図）

A区中央東半部で検出した住居跡である。SI495・496、SD501と重複し、SD501より古く、SI495・496より新しい。東半部南半は調査区外へ広がるが、北半はSD501に完全に壊されている。規模は西辺7.4m、北辺4m以上で、平面形は方形である。検出部分にはカマドの痕跡がみられないが、SD501に壊された北東部で焼土が多くみられることからこの付近に付設されていたと推定される。住居の方向は西辺でみると、北で約13度西へ偏している。

遺物は須恵器、土師器、瓦の他に繩文土器片が1点出土している。須恵器には环7点・高台环1点・甕の胴部破片4点があり、环の底部資料では、回転糸切り無調整のもの1点、切り離し技法が不明で手持ちヘラケズリ調整のものが3点ある。土師器は非ロクロ調整の甕の口縁部・胴部・底部破片11点である。瓦は一枚作りの平瓦片である。

SI495（第4図）

A区中央東半部で検出した住居跡である。SI493・494、SD501と重複し、SD501・SI494より古いが、SI493との関係はSD501に壊されているため不明である。西辺約4.8mを検出しているだけであるため、規模・平面形・カマドの付設された場所については不明である。住居の方向は西辺でみると、北で約23度東へ偏している。

遺物は出土していない。

SI496（第4図）

A区南半東端部で検出した住居跡である。SI494・497と重複し、SI494より古く、SI497より新しい。南西隅の南辺約40cm、西辺約2mを検出しているだけであることから、規模・平面形・カマドの付設された場所については不明である。住居の方向は、SI494とほぼ同じで、西辺でみると、北で約13度西へ偏している。

遺物は須恵器の甕の体部破片1点と非ロクロ調整の土師器の甕の胴部・口縁部破片7点が出土している。

SI497（第4図）

A区南東部で検出した住居跡である。SI496と重複し、これより古い。東辺は調査区外である。規模は西辺約5.3m、南辺3.9m以上で、平面形は方形をなす。カマドは東辺に付設されていたと考えられる。住居の方向は、西辺でみると、北で約4度東へ偏している。

遺物は須恵器の壺の体部破片1点と非ロクロ調整の土師器の甕の胴部破片6点が出土している。

SI509（第4図）

A区南東隅で検出した住居跡である。検出した部分は西辺約1.8m、北辺約50cmの北西隅の一部である。遺物は出土していない。

SI506（第4図）

B区中央南端部の基本層序第3層上面で検出した住居跡である。SX503、SD505溝と重複し、いずれよりも古い。西半部はSX503に壊され、南半部は調査区外へ広がる。規模は北辺2.8m以上、東辺1.2m以上で、平面形は隅丸方形とみられる。検出部分ではカマドは認められない。住居の方向は、北辺でみると西で約8度南へ偏している。遺物は出土していない。

(3) 内郭区画施設

平成5年度の第20次調査で検出していった内郭東辺区画施設に伴う外側（東側）の溝（SD331）の北延長線にあたる溝をA区で検出している。

SD498（第9図）

A区南西隅で検出した南北溝である。調査区の関係で溝の東側半分だけの確認であるが、長さ約6m検出している。平面の輪郭は、直線状ではなく緩やかに蛇行している。規模は上幅が南端部付近で1m以上、深さは遺存状況が悪く約40～50cmで、底面は平坦である。

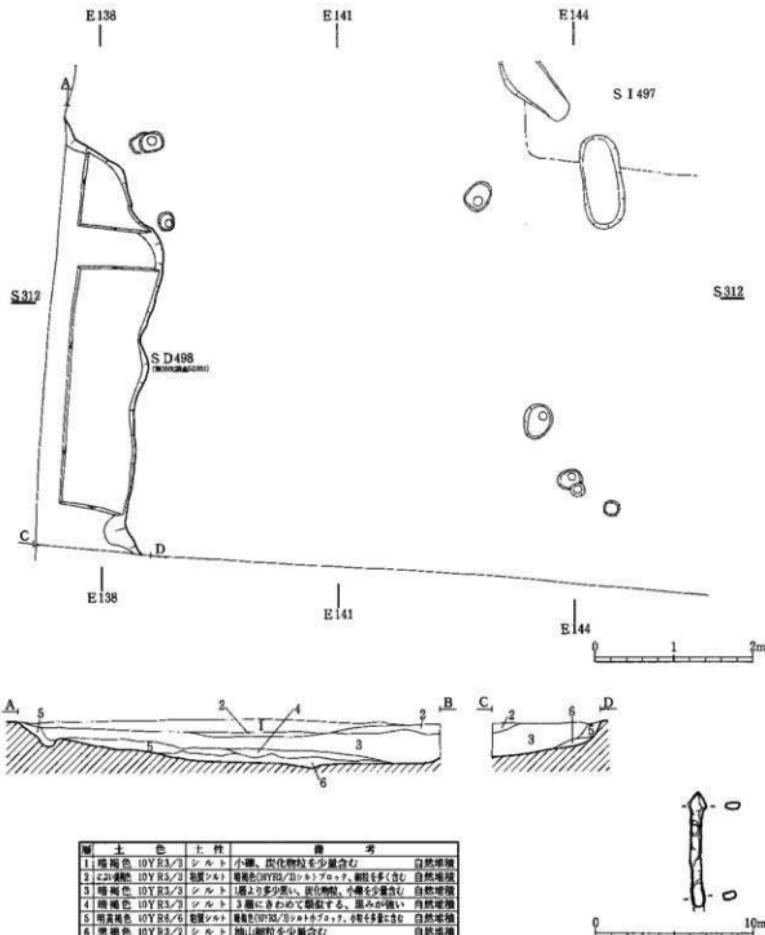
堆積上は6層に分けられる。またこれらの堆積層は、①地山のローム小ブロック・小粒をあまり含まず均質な黒褐色土～暗褐色土（1・3・4・6）と②地山のロームが主体で、黒褐色土・暗褐色土が混じるもの（2・5）に区別できる。①・②とも自然堆積とみられる。溝の方向は、東側上端部でみると北で約10度西へ偏している。

遺物は少量の須恵器と土師器の破片資料の他に鉄鏃が1点（第8図）出土している。須恵器は壺が7点出土しており、この中の3点が底部の資料である。底部の切り離し技法をみると、ヘラキリの後に手持ちヘラケズリ調整のもの2点、切り離し技法が不明で回転ヘラケズリ調整のもの1点がある。土師器は非ロクロ調整の甕の口縁部・胴部破片10数点と内黒の壺3点が出土している。壺に

は半底のものが1点みられる。

(4) その他の遺構

以上の遺構の他に、完掘した遺構にはA区のSD501溝、B区のSD510溝があり、精査した遺構には柱穴がある。また平面確認に留めてあるものとしては、A区のSK499・500・502土壙、B区の



第9図 SD 498溝・出土遺物

SD505溝、SK507土壙、SD508溝がある。以下完掘した遺構から順に特徴を簡単に述べてゆく。

SD501溝（第4図）

一度掘り直されている上幅2m前後、深さ20cmほどの南北溝である。豊穴住居跡を壊しているため比較的多くの須恵器・土師器の他に明治時代以降の染付磁器片が出土している。図示できるものはないが、須恵器には壊7点・蓋の端部片1点・瓶類底部破片1点・甕の体部破片8点がある。壊の底部資料では、底部の切り離し技法がヘラキリで無調整のもの4点・回転ヘラケズリのもの1点・手持ちヘラケズリのもの2点がある。またこの中の回転ヘラケズリのものの外面には墨痕がみられる。土師器にはロクロ調整と非ロクロ調整の両者がある。ロクロ調整のものは甕の口縁部・胴部破片2点、また非ロクロ調整のものは甕の胴部・底部破片20数点である。

SD510溝（第5図）

B区北西隅で検出した南北溝で、SX503土取り跡の西側約50cmにあり、南北両端は調査区外へ続く。SX503溝とはほぼ平行している。検出面は地山ローム層下層の綿まりのない粗砂状の基盤層である。幅は上幅約60cm、深さは遺存状況が悪く約10cmで、断面形は皿状をなす。溝の方向は、東側上端部でみると、北で約10度西へ偏している。堆積土は、地山のローム細粒を含む暗褐色土1層である。遺物は出土していない。

柱穴（第4図）

A区で検出している柱穴は、規模からみて①一辺が50cm以上の比較的大きいものと②20~30cmほどのものに区別でき、①はSI491より北側に、②はSI491の南側一帯にみられる。柱痕跡が認められるものについては、建物としての組み合わせを検討したが、建物跡と断定できるものはなかった。また遺物は、①の2個の柱穴で、埋土から古代の須恵器・土師器や平瓦片が少量出土している。②の柱穴については遺物が出土していない。

次に平面確認に留めてある遺構についてまとめておくことにする。

SK499土壙（第4図）

A区のSI492住居跡と重複する土壙で、SI492より新しい。平面形は多少歪んだ梢円形をなし、長軸（東西）約1.1m、短軸（南北）約0.7mである。南東部の側壁際に焼土がみられた。堆積土は炭化物を含む黒褐色土である。遺物は非ロクロ調整の土師器の甕の胴部破片6点の他に繩文土器片1点が出土している。

SK500土壙（第4図）

A区中央西半部で検出した土壙である。5基の土壙が重複しているが、この中で遺物の出土した最も大きな土壙である。平面形は梢円形をなし、長軸（南北）約3m、短軸（東西）1.8mである。堆積土は黒褐色土である。遺物は、2段の波状文がみられる須恵器の甕の頭部破片1点、非ロクロ調整の土師器の甕の胴部破片20点の他に古墳時代とみられる土師器の壊類の体部破片1点が出土している。

SD505溝（第4図）

B区中央部の第3層上面で検出した南北溝の南端部と東西溝の東端部がほぼ直角に交わるL字形

の溝である。SI506、SX503と重複しSI506より新しく、SX503より古い。上幅30~50cm、深さ約20cmで、側壁は比較的急角度に立ち上がり断面形はU字形をなす。溝の方向は東西方向の溝の南側上端部でみると、東で約8度北へ偏している。堆積土は黒色~黒褐色土である。遺物は出土していない。

SK507土壤（第4図）

B区中央部の第2層上面で検出した土壤である。平面形は円形で、径約1.4mである。堆積土は地山の小粒を多く含む暗褐色土である。遺物は須恵器の壺の口縁部・胴部破片各1点と、非ロクロ調整の上師器の壺の胴部破片10数点が出土している。なお、本土壤の年代は、確認面が基本層序の第2層上面であることから、灰白色火山灰の降下時期である10世紀前半より新しいものである。

SD508溝（第6図）

B区北西部の第3層上面で検出した東西溝である。ただし東半部は調査区外であることから平面形が梢円形の土壤である可能性も考えられる。SD504と重複して、これより新しい。検出部分の規模は、上幅約1.8m、長さは6m以上である。堆積土は灰白色火山灰小粒・小ブロック、地山小粒を多く含む暗褐色土である。遺物は出土していない。

VII. 考察

今回の調査では、B区で調査目的である外郭東辺区画施設に関連する遺構を検出している。これらの検討をおこなう前に、遺構に伴う遺物は極めて少ないためある程度大ざっぱな把握になるが、最初に検出した遺構の時期・年代についてまとめておくことにする。

(1) 遺構の時期・年代について

A. 壑穴住居跡

壗穴住居跡では、床面まで掘り下げたSI491・493から土師器・須恵器などが出土している。SI491では床面から須恵器の高台壺と不明の銅製品、また堆積土から須恵器と土師器、砥石が出土している。床面出土の須恵器の高台壺は、壺部下半が屈曲して稜をもち、高台が低くて厚い大型のものと、端部が多少肥厚する高い高台で、体部下半が丸味をもって立上がるやや深めの小型のものである。このような特徴を持つ高台壺は、昭和52年度の宮城県多賀城跡調査研究所による調査で検出されたSI04住居跡や第15次調査で検出されたSI173住居跡出土のもの、第20次調査のSK364土壤出土のものなどに類例がみられる。そしてSI04は、年代が8世紀後半~9世紀中頃（宮城県多賀城跡調査研究所 1978）、SI173は8世紀末から9世紀初頭（築館町教育委員会 1992）と考えられている。

堆積土からは、須恵器では壺・蓋・瓶類・壺、土師器ではロクロ調整とみられる両窓の高台壺1点と非ロクロ調整の壺が出土している。このように堆積土から出土した上師器にロクロ調整のものと非ロクロ調整のものが混じる状況は、年代がロクロ調整の土師器が主体となる以前の8世紀後半から9世紀初頭頃とされている伊治城存続時期の遺構出土の土器のあり方と共通している。

以上からSI491の年代は、およそ8世紀後半から9世紀初頭頃と考えられる。

SI493は堆積土から須恵器と土師器がまとまって投棄されたような状況で出土している。須恵器には壺・高台壺・蓋・瓶類・壺があり、壺には底部から体部下端付近にかけて回転ヘラケズリ調整の小形で深いコップ状のもの、器形が逆台形で底部の切り離し技法がヘラキリで無調整のもの、ヘラキリで軽いナデ調整のものなどがみられる。蓋はやや高い丸味を帯びた天井部の大型で、つまみがやや扁平な擬宝珠のものと、つまみは部は欠損しているが、天井部が高く断面形が台形状のものである。

土師器にはロクロ調整と非ロクロ調整のものがあり、ロクロ調整のものには底部周辺から体部下半にかけてヘラケズリされた小形の壺がある。非ロクロ調整のものには壺と壺があり、壺は内黒で外面ミガキ調整の口縁部～体部破片1点があり、外面には沈線がみられる。壺は口縁部が外反し、頸部に段をもつ長胴形をなし、胴部外面はハケ目調整の後にヘラケズリ調整が施されている。このような特徴を持つ土器のまとめりは、前述のSI173住居跡をはじめとする伊治城存続時期の遺構出土の土器のあり方と共に通している。したがってSI493の年代は、SI491と同様に8世紀後半から9世紀初頭頃とみられる。

その他の住居跡については、あまり遺物は出土していないが、出土した土器の特徴にSI491・493出土の土器と明らかに異なる特徴をもつものがみられないことから、年代はSI491およびSI493とおよそ同じ時期のものとみられる。

B. 外郭区画施設

SX503は1層が、またSD504は3層が灰白色火山灰層であることから、両遺構とも10世紀前半以前の古代ものであることは明らかである。SX503では2～4層にかけて、須恵器と土師器および瓦が出土している。須恵器には壺・高台壺・蓋・瓶類・壺があり、6点ある壺底部の切り離し技法をみると、ヘラキリ無調整のもの1点、ヘラキリの後にナデ調整のもの2点、ヘラキリの後に手持ちヘラケズリ調整のもの1点、切り離し技法が不明で回転ヘラケズリ調整のもの1点がある。

土師器にはロクロ調整のものと非ロクロ調整の壺が出土しており、非ロクロ調整のものが多くみられる。この他、平瓦には1枚作りのものが確認できる。このような土器のあり方は、前述のSI491・493やこれまでの伊治城の外郭区画施設に伴う溝や土取り跡からの出土遺物のあり方に共通している。

SD504では、灰白色火山灰層以下の4・5層から底部切り離し技法がヘラキリ無調整の須恵器の杯と特徴の捉えられない土師器の小破片が各1点出土しているだけである。したがって遺物からいえることはないが、灰白色火山灰層の存在とこれまでの外郭区画施設を対象とした調査成果からみて、伊治城の存続時期の外郭区画施設に伴う溝と捉えられる。

C. 内郭区画施設

SD498は、第20次調査で検出している内郭区画施設に伴う外側の溝（SD331）の北延長線上に位置していることから、今回は東半分の部分的な検出にすぎないが、内郭区画施設に伴う外側の

溝といえる。遺物は少量の須恵器と土師器が出土しており、これらは伊治城存続時期の遺構出土の土器の特徴から外れるものではない。

D. 柱穴およびその他の遺構

柱穴については、規模が大きいものは古代の須恵器・土師器や平瓦が出土していることから古代の可能性が考えられる。小規模のものについては遺物が全く出土していないため時期を特定することはできない。

土壤については、SK500が出土遺物より古代の可能性がある。また、SK507は確認面が基本層序の第2層上面であることから、10世紀前半以降のものである。それ以外のものについては不明である。

溝については、SD505は遺構の重複関係から伊治城の存続時期のものといえるが、性格については不明である。SD508は、重複関係から灰白色火山灰の降下以後、すなわち10世紀前半以降のもの、また、DS501が明治時代以降の近・現代のもの、SD510は時期・性格とも不明である。

(2) 外郭東辺区画施設について

今回の調査の主な目的は外郭東辺区画施設の検出にあり、B区でSX503土取り跡、SD504南北溝を検出している。

SX503は、西縁辺が蛇行するように大きく入りし、底面には凹凸がみられる。部分的な確認ではあるが、このような特徴は外郭西辺および北辺を対象とした第22～24次調査（築館町教育委員会 1996～1998）で検出されている土取りの跡のそれと共通することから、SX503はこれらと同様に土取りの跡とみられる。

堆積土は、①均質な黒褐色土を主体とする層と、②地山をはじめとする種々の土が均質に混じった層に区別される。またこれらの堆積状況は、最下層から中位にかけて①が堆積し、その上面から柱穴が掘り込まれている。そしてその上には②と①がこの順で交互に堆積している。

ところで、①は自然堆積層とみてまず間違いないものである。また②はこれまで埋め戻しの土と捉えられていたものである。しかし、②を埋め戻し土とみた場合、あいだに①の自然堆積がみられることから、埋め戻しが断続していることになる。また埋め戻しても表面が窪んでいるなど不自然な状況がみられる。

ところで、昨年度の第24次調査では、検出した土壘（SF489）南側で、土壘の崩壊土の堆積状況が確認されている。崩壊土は、地山小ブロック・小粒や種々の土粒が偏りなく均質に混じる層で、SX503の②の土相の特徴ときわめて類似している。そして②を崩壊土みた場合、SX503の堆積状況は、崩壊土と自然堆積が交互にみられるなど、第24次調査の土壘（SF489）南側の堆積状況と共通したあり方を示している。以上からSX503の②は、埋め戻しの土ではなく崩壊土の可能性が高いと考えられ、堆積土の流入する方向が東側であることから、現在はその痕跡がなんら残っていないSX503の東側に、外郭東辺区画施設である土壘の存在が想定される。そして、その場合SD504は想定された土壘に伴う外側の溝と考えられる。

このように今回の調査では、土壘そのものの自体の痕跡は検出できなかったが、SX503の堆積土の



第10図 外郭線調査地点と外郭推定線 (某町教育委員会1996を一部改変)

状況から十星の存在の想定が可能であり、東側のSD504南北溝はその想定された土壘に伴う外側の区画溝と位置付けられる。

次に東辺のこれまでの調査成果と比較検討してみたい。

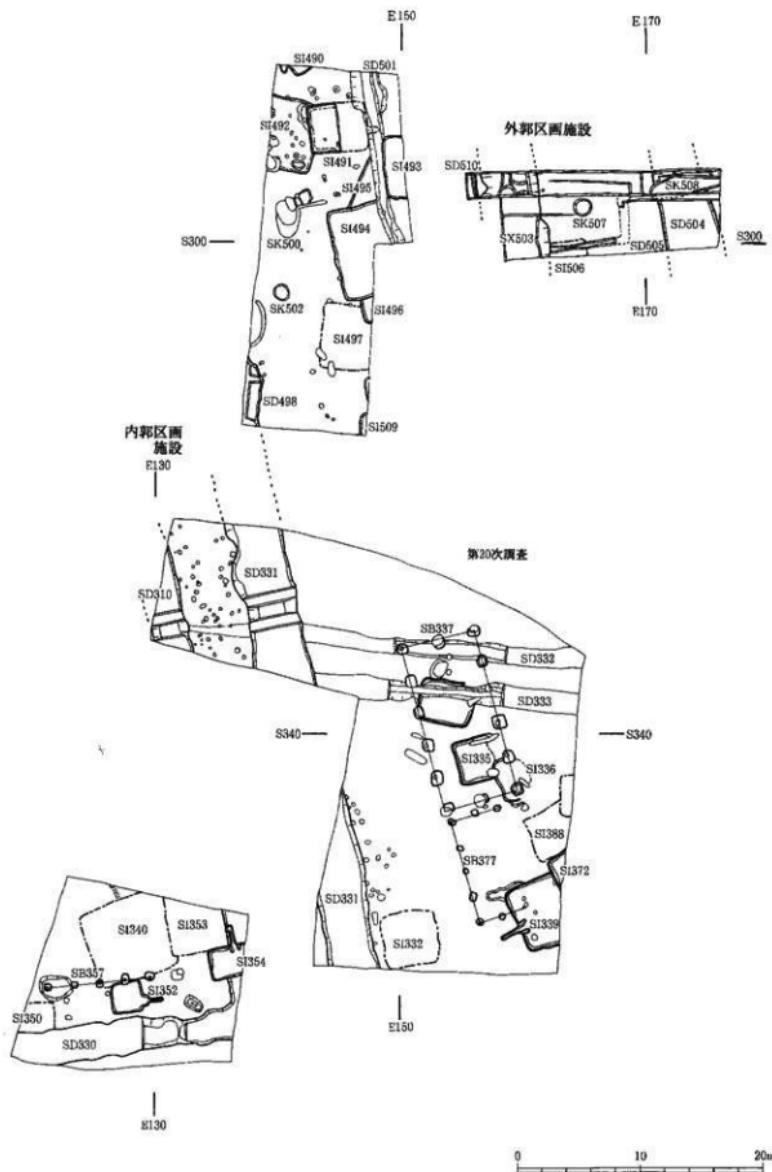
東辺の調査は2度実施されている。昭和63年度の第8次調査（第10図第2・7地点）では、断面観察で堆積土に灰白色火山灰層のみられる南北溝を2ヶ所で確認している（築館町教育委員会 1989）。平成2年度の第16次調査（第10図第2地点）では、台地東端部の緩斜面で、約3mの間隔をおいてほぼ平行する幅約4mの南北溝を2条（SD201・202）検出している。このうち地形的に低い東側の溝（SD201）は、堆積土中には灰白色火山灰層が認められており、第8次調査で検出している溝と同じものと思われる（築館町教育委員会 1991）。

これらSD201・202と今回検出したSX503、SD504について比較すると、SD504は位置関係、規模、堆積土の状況から第8次調査で検出した溝、すなわち第16次調査で検出している東側のSD201と対応する一連の溝とみて間違いないであろう。またSX503は、SX503とSD504の間隔が約9m、SD201とSD202の間隔が約3mといった違いはあるが、位置関係からみてSD202に対応すると考えられ、SD202は土取りの跡の可能性が高い。

以上の外郭東辺区画施設と、これまで検出されている外郭北辺区画施設について対応関係をみると、北辺の区画施設としては、土壘2条（SF01=SF489、SF03）とそれらに伴う外側の溝（SD02=SD493、SD493の北側約12mで確認されている溝）がある。また内側のSF01=SF489土壘には、その内側に溝状の土取りの跡（SX456）も確認されている。そして現存する土壘は発掘調査で検出している外側のSF03と、また埋まりきらない溝は、内側のSF01=SF489土壘に伴う外側のSD02=SD493溝にそれぞれ対応している（築館町教育委員会 1998）。

ところで前述の16次調査では、SD201・202溝を100mほど北側にみられる北辺の十星と埋まりきらない溝に続く外郭東辺区画施設に関連する溝と捉えられている（築館町教育委員会 1991）。したがって東辺で検出したSD504とSD201は、規模に違いはみられるが、北辺の現状でまだ埋まりきらない溝、すなわち内側のSF01=SF489土壘に伴う外側のSD02=SD493溝に接続する可能性が高いと考えられる。そして今回の調査で存在が推定された土壘は、北辺の内側のSF01=SF489土壘と対応するとみられる。

西辺では、現在は堰の改修工事で失われてしまったが、北半部で北辺と同様に土壘と溝が昭和30年代まで観察されていた（築館町教育委員会 1989）。この西辺を対象にした調査では、台地縁辺に沿った幅2.8~3.5mほどの南北方向の溝と、その内側3m~20m前後の範囲に2条の土取り跡を検出している（第10図第5・6地点）。そして区画施設本体の痕跡は検出されていないが、土取り跡の存在から土壘を想定し、南北溝をそれに伴うものと考えている（築館町教育委員会1996・1997）。このような外側に溝を作り土壘の存在が想定される西辺のあり方は、東辺の状況と共通している。しかし、西辺では土取りの跡が2条確認されているのに対して、東辺では1条であるといった違いがある。また、西辺の区画施設と北辺の土壘・溝との対応関係については捉えられてない。このため、西辺・東辺で検出している区画施設に関連する遺構の対応関係については不明である。



第11図 第25次調査・第20次調査検出遺構配置図

以上のように今回の調査では、外郭東辺区画施設として土塁の存在の想定とそれに伴う外側の溝を確認でき、それらは北辺の内側の土塁とそれに伴う外側の溝に対応すると考えられた。しかし、伊治城跡の外郭区画施設は、今回の調査を含めたこれまでの調査から、外側に溝を伴う土塁であるとみられるが、今後明らかにしてゆかねばならない多くの問題を残しているのも現状である。例えば北辺で確認されている2条の土塁の変遷の問題、西辺・東辺におけるさらなる区画施設の有無の確認、そして土塁が2条確認されている北辺と各辺との対応関係の把握などが今後解明されなければならない課題として考えられる。このような課題を明らかにしてゆくためには、まだ着手されていない南辺を対象とした調査は当然のことであるが、各辺で外郭区画施設の位置や変遷の解明を目的とした調査をさらに今後も計画的に実施してゆくことが必要であろう。

(3) 内郭東辺区画施設について

SD498は、部分的な検出に留まるが、第20次調査で検出している内郭区画施設に伴う外側の溝(SD331)の北延長線上に位置していることから、SD331と一連の内郭東辺区画施設に伴う外側の溝である(第11図)。これまでの調査で内郭区画施設は、本体積土は検出されていないが、築地と考えられる。そして、外側に溝を伴い、内側には重複する2時期の溝状の上取り跡が確認されている。また、第20次調査では内郭の南東隅を確認しており、外側(SD331)、内側(SD330)の両溝とも埋め戻されているとしている(築館町教育委員会 1994)。しかし、今回検出しているSD498は、堆積土の層相・堆積状況からみて自然堆積によって埋没しているとみられる。また内郭北西隅部検出している第7次調査(築館町教育委員会 1989)、第11・13次調査(築館町教育委員会 1990)では、内郭区画施設に伴う外側の溝の堆積土中には灰白色火山灰層がみられ、開放していたところは確実である。以上から内郭区画施設に伴う外側の溝は、埋め戻されているのではなく自然堆積で埋没したとみるのが妥当と考えられる。

VII. ま と め

- ①: 今回の調査で検出した遺構には、外郭東辺区画施設に伴う外側の溝と内側の溝状の上取りの跡、竪穴住居跡、内郭区画施設に伴う外側の溝の他に柱穴、土壤、溝などがある。
- ②: 各遺構の年代については、精査したものが少なく出土した遺物も多くないが、竪穴住居跡・外郭・内郭区画施設に関する遺構は年代がおよそ8世紀後半から9世紀初頭頃とみられる。
- ③: 外郭東辺区画施設として外側に溝を伴う土塁の存在が想定される。そしてそれらは北辺で検出している2条の土塁のうち、内側の土塁とそれに伴う外側の溝に対応すると考えられる。
- ④: 内郭区画施設に伴う外側の溝は、第20次調査では埋め戻されているとしているが、埋め戻されているのではなく自然堆積によって埋没していると判断される。
- ⑤: 伊治城跡の南辺を除く外郭各辺の区画施設は、外側に溝を伴う土塁とみられる。しかし、それらが2条みられる北辺、各1条の溝と土取り跡の東辺、溝1条に土取り跡2条の西辺というように、各辺での外郭区画施設のあり方に現段階では整合性がみられない。このことの究明は今後の調査の課題である。

参考文献

- 小井川和夫・手塚 均 1978 「藤塚遺跡」「宮城県文化財発掘調査報告書(昭和52年度分)」宮城県文化財調査報告書第53集 宮城県教育委員会
- 小井川和夫・小川 淳一 1982 「御駒堂遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書VI」宮城県文化財調査報告書第83集 宮城県教育委員会
- 築館町教育委員会 1989 「伊治城跡-昭和63年度発掘調査概報-」「築館町文化財調査報告書第2集」
- 築館町教育委員会 1990 「伊治城跡-平成元年度発掘調査概報-」「築館町文化財調査報告書第3集」
- 築館町教育委員会 1991 「伊治城跡」「築館町文化財調査報告書第4集」
- 築館町教育委員会 1992 「伊治城跡-平成3年度発掘調査概報-」「築館町文化財調査報告書第5集」
- 築館町教育委員会 1994 「伊治城跡-昭和5年度発掘調査概報-」「築館町文化財調査報告書第7集」
- 築館町教育委員会 1995 「伊治城跡-平成6年度発掘調査概報-」「築館町文化財調査報告書第8集」
- 築館町教育委員会 1996 「伊治城跡-平成7年度発掘調査概報-」「築館町文化財調査報告書第9集」
- 築館町教育委員会 1997 「伊治城跡-平成8年度発掘調査概報-」「築館町文化財調査報告書第10集」
- 築館町教育委員会 1998 「伊治城跡-平成9年度発掘調査概報-」「築館町文化財調査報告書第11集」
- 平沢英二郎・手塚 均 1980 「佐野遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書II」宮城県文化財調査報告書第63集 宮城県教育委員会
- 真山 悟 1980 「大門遺跡」「東北新幹線関連遺跡調査報告書-II-」宮城県文化財調査報告書第62集 宮城県教育委員会
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1978 「伊治城跡I-昭和52年度発掘調査報告-」「多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第3冊」宮城県多賀城跡調査研究所
- 三好 秀樹 1996 「長者原遺跡」「栗駒町文化財調査報告書第3集」栗駒町教育委員会

付表1 「伊治城跡」調査および報告書一覧

◎多賀城跡調査研究所による調査

年次	調査内容	発掘面積	発掘期間	備考	文献
昭和51年度 (1976)	地形図作成(航空測量) 現地踏査・研究史整理				
昭和52年度 (1977)	①北外郭縁堀柵調査 中央平坦部地区発掘調査	168m ² 270m ²	7/4~8/3	大溝1、土塁1、土器状遺構1 焼失窓穴住居1、墨書き土器「城廬」	(1)
昭和53年度 (1978)	②中央平坦部地区発掘調査 西外郭縁堀地区電気探査	780m ²	7/3~8/4 11/11~11/13	窓穴住居4、掘立柱建物1、井戸6、溝5、 土壤4	(2)
昭和54年度 (1979)	③中央平坦部地区発掘調査	1,000m ²	10/29~12/4	窓穴住居17、掘立柱建物2、井戸、溝、土壤	(3)

◎美術館・教育委員会・宮城県文化財保護課による調査

昭和62年度 (1987)	1. 農道整備 2. 施設移転 3. 個人住宅便橋取付 4. 水道埋設 5. 農道整備 6. 施設整備	220m ² 150m ² 2m ² 1,250m ² 1,080m ² 80m ²	7/1~8/12 7/4~7/18 8/5 9/1~9/14 1/18~2/9 2/25	窓穴住居5(うち焼失住居1)、溝4、井戸1 窓穴住居5、土壤1 窓穴住居8 窓穴住居7、土壤2、溝	(4)
昭和63年度 (1988)	7. 国庫補助事業 8. 水道管理設 9. 農道整備	1,500m ² 142m ² 504m ²	7/1~10/30 11/4~11/24 2/6~2/12	内郭区画溝2、窓穴住居2、土壤、円形周溝1 東外郭大溝1?、窓穴住居3、溝	(5)
平成元年度 (1989)	10. 宅地現状変更 11. 国庫補助事業 12. 通学路整備 13. 農道整備 14. 水道管理設	480m ² 1,200m ² 1,700m ² 1,960m ² 170m ²	4/11~6/1 7/21~11/22 9/5~9/16 10/16~11/10 11/29~12/8	窓穴住居4、掘立柱建物1、土器埋設土壌1 内郭区画溝1、掘立柱建物3、窓穴住居9 北外郭大溝2、古墳時代中期溝1 内郭区画溝2、(政庁城)掘立柱建物・溝 窓穴住居3	(6)
平成2年度 (1990)	15. 国庫補助事業 16. 道路整備(大堀線)	900m ² 1,320m ²	9/3~9/29 9/27~10/5	掘立柱建物3、窓穴住居8、円形周溝1、井戸2 東外郭大溝2?、窓穴住居16、溝、井戸、土壤	(7)
平成3年度 (1991)	17. 国庫補助事業 18. 個人住宅	1,300m ² 300m ²	5/27~7/16 11/19~12/2	(政庁城)正殿・後殿・脇殿・南門・築地 古墳時代居跡跡	(8)
平成4年度 (1992)	19. 国庫補助事業	1,300m ²	5/11~7/4	(政庁城)正殿・後殿・脇殿・南門・築地 (内郭南側)掘立柱建物、窓穴住居、溝、土壤	(9)
平成5年度 (1993)	20. 国庫補助事業	1,500m ²	10/4~11/18	(内郭南東隅)築地、掘立柱建物、窓穴住居 (内郭南側)掘立柱建物、窓穴住居、土器埋設	(10)
平成6年度 (1994)	21. 国庫補助事業	820m ²	10/3~11/27	(内郭北側)掘立柱建物、窓穴住居、溝 (内郭南側)掘立柱建物、窓穴住居、占溝	(11)
平成7年度 (1995)	22. 国庫補助事業	1,140m ²	10/5~11/14	(内郭北側)掘立柱建物、土壤 (外郭南西側)南西辺大溝跡1、溝状遺構2	(12)
平成8年度 (1996)	23. 国庫補助事業	450m ²	10/7~11/7	(外郭北西側)大溝1、溝状遺構2、 窓穴住居1、柱列1、土壤	(13)
平成9年度 (1997)	24. 国庫補助事業	480m ²	10/6~11/7	(外郭北辺)大溝1、土取り跡3、 窓穴住居跡4	(14)

(1)宮城県多賀城跡調査研究所	1978	『伊治城跡 I -昭和52年度発掘調査報告書』「多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第3回」
(2)	〃	1979 『伊治城跡 II -昭和53年度発掘調査報告書』「多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第4回」
(3)	〃	1980 『伊治城跡 III -昭和54年度発掘調査報告書』「多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第5回」
(4)築館町教育委員会	1988	『伊治城跡 -昭和62年度発掘調査概報-』「築館町文化財調査報告書第1集」
(5)	〃	1989 『伊治城跡 -昭和63年度発掘調査概報-』「築館町文化財調査報告書第2集」
(6)	〃	1990 『伊治城跡 -平成元年度発掘調査概報-』「築館町文化財調査報告書第3集」
(7)	〃	1991 『伊治城跡』 「築館町文化財調査報告書第4集」
(8)	〃	1992 『伊治城跡 -平成3年度発掘調査報告書-』「築館町文化財調査報告書第5集」
(9)	〃	1993 『伊治城跡 -平成4年度発掘調査報告書-』「築館町文化財調査報告書第6集」
00	〃	1994 『伊治城跡 -平成5年度発掘調査報告書-』「築館町文化財調査報告書第7集」
01	〃	1995 『伊治城跡 -平成6年度発掘調査報告書-』「築館町文化財調査報告書第8集」
02	〃	1996 『伊治城跡 -平成7年度：第22次発掘調査報告書-』「築館町文化財調査報告書第9集」
03	〃	1997 『伊治城跡 -平成8年度：第23次発掘調査報告書-』「築館町文化財調査報告書第10集」
04	〃	1998 『伊治城跡 -平成9年度：第24次発掘調査報告書-』「築館町文化財調査報告書第11集」

付表2 伊治城および栗原郡に関する古代史年表

西暦	和暦	記事	文献
767	神護景雲1 768 769	10. 伊治城の造営なる。造営にたずさわった鎮守将軍田中多太麻呂らに叙位、外從五位下道嶋三山は從五位上を賜う。 12. 陸奥や他国の百姓で伊治・桃生に住みたいものの課役を免ずる。 1. 伊治・桃生にうつり住みたいものの課役を免ずる。 2. 桃生・伊治に板東8国百姓を募り安置しようとする。 6. 栗原郡をおく。これはもと伊治城である。 (『続日本紀』では神護景雲元年11月乙巳条に収めるが錯簡とみられ、ここでは神護景雲3年6月9日乙巳説をとる) 6. 浮宮の百姓2,500人を伊治城に遷す。	続日本紀 続日本紀 続日本紀 続日本紀 続日本紀 続日本紀
780	宝亀11	3. 上治郡大領伊治公背麻呂は杜氏郡の大領道嶋大橋、按察使紀広純を伊治城で殺す。ついで、多賀城にせまり府庫の物をとり放火する。	続日本紀
792	延暦11	1. 斯波村の夷胆沢阿奴志己らは帰服したいが伊治村の俘に妨げられて果たせないでいることを訴える。	類聚国史卷190
796	15	11. 伊治城と玉造塞の中間に1駅を置く。 11. 相模・武藏・上総・常陸・上野・下野・山内・越後などの住民9,000人を伊治城に遷し置く。	日本後紀 日本後紀
804	23	11. 栗原郡に3駅を置く。	日本後紀
837	承和4	4. 3年春より百姓の妖言に奥邑の民が動搖し、栗原・賀美両郡の百姓多く逃亡する。また、栗原・桃生以北の俘囚は反覆して定まらないので援兵1,000人を差発して非常に備える。	続日本後紀
905	延喜5 (着手)	延喜式 ○神名式 陸奥国100座 栗原郡7座 大1座 表刀神社 小6座 志波姫神社 雄銳神社 駒形根神社 和我神社 香取御兒神社 遠流志別石神社 ○民部式 東山道・陸奥国大國 ……志太、栗原、磐井…… ○兵部式 陸奥国駿馬 ……玉造、栗原、磐井……各5疋	
931 ? 938	承平年間	和名類聚抄 陸奥国 栗原郡(久利波良) (郡名)栗原・清水・仲村・会津	和名類聚抄

写 真 図 版



伊治城跡全景（1976年撮影）

この空中写真は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を掲載したもので。（承認番号平11東復第258号）



調査区遠景（北東から）



調査区全景（北から）



調査区全景



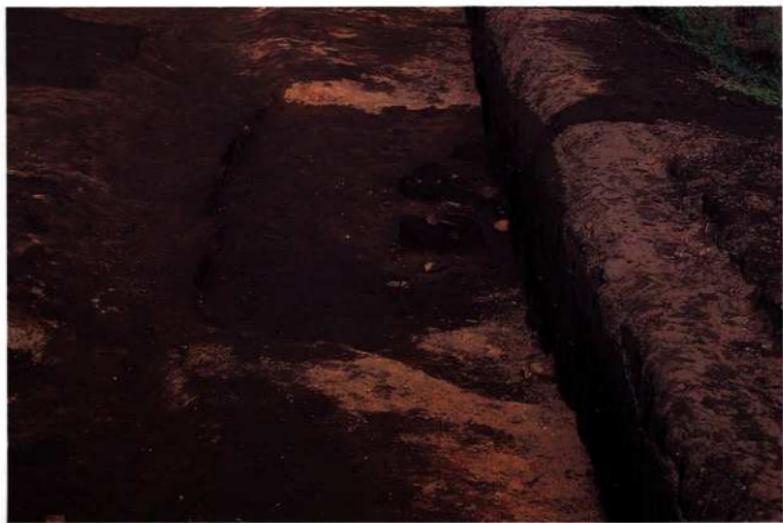
A区北半部検出SI491・492住居跡（北から）



SI491住居跡断面図（西から）



A区SI491遺物出土状況（西から）



A区SI493住居跡（南から）



A区SD498溝（南から）



B区全景(南西から)



B区SD504溝断面図（北壁）



B区SX503土取り跡断面（南壁）



1



3



4



2



6



7



8



9



10



11



12

1~9 : S=½
1~2·10 : SI491
3~9·11 : SI493
12 : SD498

SI491·493住居跡、SD498溝出土遺物

築館町文化財調査報告書 第12集

伊 治 城 跡

印 刷 平成11年3月25日

発 行 平成11年3月31日

発 行 築館町教育委員会

〒987-2293

宮城県栗原郡築館町築館一丁目7-1

TEL 0228 22-1125

印 刷 機 小 野 寺 印 刷 所

宮城県栗原郡築館町伊豆一丁目7-3

